



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アメリカ遠征記
Author(s)	坪田, 敏男
Citation	新ひぐま通信 別冊 : 第7回国際クマ会議報告書, 64-73
Issue Date	1986-08-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91584
Type	report
File Information	kikou_tsubota.pdf



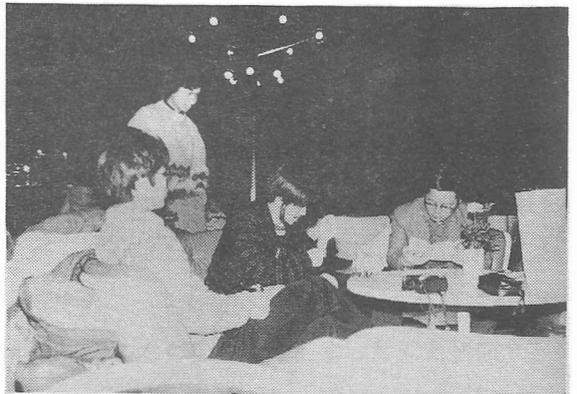
アメリカ遠征記

坪 田 敏 男

出 立

2月18日。札幌で残った仕事を午前中に仕上げるつもりが出発の10分前までかかり、かなり慌しい出発となった。講座の仲間一同に見送られ大学を立ったのは既に汽車の出発時刻の20分前であった。某後輩の車で札幌駅まで送ってもらった。札幌駅では、クマ研の某後輩の美人妻にお弁当の差し入れと日本からのおみやげ用にと着物女性のしおりをいただく（後にこれが役立った）。大感謝。一緒に渡米するO君と汽車に乗り込み、二人してこれからの旅のことをあれこれと話しながら差し入れの寿司を頬ばった。汽車が途中踏み切り事故に会い、15分位遅れるというアクシデントに見舞われた。千歳空港では、東京が悪天候のため30分も出発が遅れた。どうもさい先が悪いと思いつつもあまり不安なことは口には出さず気にしないようにと自分に言い聞かせた。東京では、やはり一緒に渡米するM君の家に泊めてもらった。M君の家では、彼の御両親が我々のクマ会議での成功を期して御馳走と酒で祝って下さった。ありがたいもてなしを受け、皆心地よい気分で酔えたであろう。「いよいよ出立の日を明日に迎え、何かせわしない気持ちからは解放されたが、不安やら期待感やら複雑な気持ちで眠りについた。」

2月19日、朝10時にM君の家を出る。昨夜来の降雪で珍しく東京の街は白一色となった。何年かぶりの豪雪という。北海道からみれば何てことない風景であるが東京では少しでも積雪があると交通網が混乱するのである。当然そのことは前の日から予期していたので早目に家を出た。そして余裕をもって新宿発のリムジンバスで成田空港へと向



出立前の成田空港でのひととき。左から間野、大館、太田、青井氏。

かった。空港につくとさすがに国際線という感じで、待合所のあちこちのテーブルを外国人が占拠していた。その中にあっても日本人の新婚カップルが目についたのは私だけであったのだろうか。そんな雰囲気の中にいればいやがおうでも外国旅行の気分が盛り上がってくるというものである。夕暮れの迫った17時頃搭乗手続きを済ませ、面倒な出国手続きも終えてロビーで搭乗を待った。そして案内のアナウンスに従って飛行機に乗り込んだ。席に着く時外人に「Excuse me」と声をかけられた。この言葉でいよいよ外国に行くんだという思いがこ

み上げてきた。定刻通り19:00発、Thai Inter ボーイング747ジャンボ機は我々を乗せて成田を飛び立った。

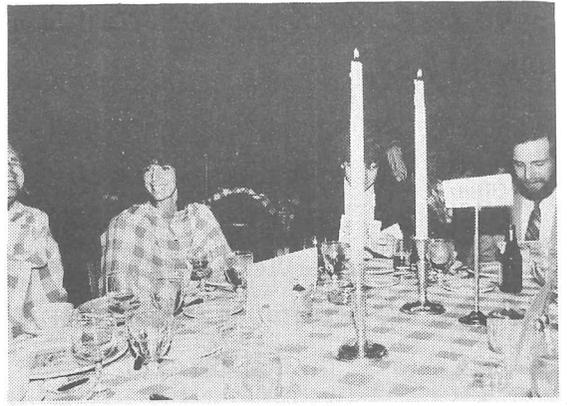
前夜祭

2月21日、3日かかってようやく目的地のウィリアムズバーグのカスケード・ミーティング・センターに着く。ミーティング・センターのすぐ近くにあるモーターハウスに荷物を置いて、午前中の Registration のため会議場に入った。Registration を終えのんびりとソファに座っていると、そこへ鬚を茫々と生やした一人の男性が近づいてきた。何かモグモグと話しかけられたのだが、何を言っているのかさっぱりわからない。それでも好奇の耳で聞き入っていると、‘私はモンタナから来た者で日本から手紙をもらったがその人はどこにいるのか’というようなことを言っていることが聞きとれた。O君がその人は今ここにはいないことを伝えた。彼が去った後、今確かジョンケルとかいわなかったかと言って、もしかしてあの人がクマの論文によく出てくる Mr. Jonkel かと思い直してえらく感激したのであった。それにしてもえらく舌たらずなんだなあというのが皆の一致した意見だった。午後からアメリカクロクマの Workshop を少し聞いて、途中で私は抜け出しハガキを出しに郵便局に行った。その帰り、私は道に迷い1時間位彷徨した揚句、人に聞き聞きやっとモーターハウスに戻ってこれた。帰ってみると皆出払っていて、戸にメモがはさんであった。本日前夜祭があるのでそこへ行くとの旨。バスはもうないし一旦は行くのをあきらめかけたが、やっぱり前夜祭に出て日本から持ってきたクマ研のパンフレットを配らにゃいかんと思い直し、夜道をトボトボと会場に向かって歩き出した。途中タクシーに拾われ（こっちが手も上げないのに止まって強引に乗れと言われた）、会場へ向かった。会場に着くと研究者達の輪がいくつもできており、その輪の中で陽気にといよりもむしろ熱心に会話が交わされていた。出遅れを感じつつビールを一杯飲み干すと適当に人をつかまえて何とかパンフレットの内容を説明した。ほとんどの人はOK、OKを連発するだけで特に関心を示してくれなかったのであるが、その中で Mark A Caron という名の一見学生らしき人が話に乗ってくれた。こっちはここぞとばかりに頭の中にあるありったけの語彙を駆り出して話をしようとするが出てくるのは中学生並の英語ばかりである。が、それでもメモ帳に絵を書きながら「Here bear, hear airplane」などとラジオトラッキングの話をしたりして結構会話ははずんだのだ！

バンケット (宴)

会議の3分の2を終えた2月24日の夜、バンケットが催された。既に数カ月前にパンフレットを受け取った段階で、このバンケットに関してはスープの中味に至るまで細密に紹介されていたのでかなり期待していたのだ。そしてその日朝からの発表と Workshop を終え、

疲労感を憶えていたのだが、そこは奮起してまずはキャッシュバーに参加した。ワイングラスを片手に皆歓談している中で、我々日本人もあまりかたまらずにバラバラになろうということで話相手を探していたところ、私はDr. Reynoldに巡り会えた。彼はアラスカのFish & Gameでヒグマを研究していて論文にもよく出てくる人だ。私の名前と発表演題を尋ねられた。彼が



バンケット。座っているのは今回の会議の世話人達。

プログラムを手にもっていたので、その中で私の発表はこれだと指さした。すると、彼はこの発表には興味があると言ってくれた。彼のプログラムをみるといくつかの発表演題に赤印がついており私のにも印がついていた。それを見た時素直にうれしく思い、心の中で「ウシッ」と叫んだ。お互いの研究内容について一通り彼と話をしたところで皆がバンケット会場に入り出したのでそれにしたがった。中には、ろうそくの灯りに照らし出されたテーブルの上に皿とグラスが並べられており、おごそかなムードをかもし出していた。私とMさんは中央のテーブルに座った。実はこの中央のテーブルは今回の会議の世話人が座るところだったのを後で知り、Mさんと二人で苦笑したものである。私は日本でもフルコースなぞ経験したことがなかったのでマナーなんてよくわからなかったが、アメリカ人（ごく一部かもしれない）はその辺にあまり気を使わないらしく各自好きなように食べているのを見て、安心した。たまたま隣に居合わせた人が私の発表の時の司会者で、そこで話をして打ち解けたことで本番の発表の時に少しリラックスできたかもしれない（それでも相当緊張してしまっただが）。一番の楽しみであったバンケットも終え、序々に会議あるいはクマの研究者の雰囲気馴染んでいくのが自分でもわかった。

ワシントン、D. C.

会議を終えた後、皆でワシントン、D. C.を訪れた。有名なスミソニアン博物館を見学するためにだ。ワシントン、D. C.に着いて我々はまず話の種にとホワイトハウスに足を向けた。一般向けに公開されているのがほんの一部ということもあり、期待した程のことはない内容であった。次に目的のスミソニアン博物館に行ってみた。そこには我々が一番興味のある自然史博物館をはじめ美術館、産業博物館、宇宙航空機博物館など十数個の博物館が集められており、さすが文化の町という印象を強く受けた。このスミソニアン博物館には何千人もの研究者が関係しているのだという。さすがスケールが違うなとوراやましく思っ

たものである。自然史博物館には、哺乳類、爬虫類、魚類、鳥類、恐竜、化石、民俗風習、進化といったように動物種毎、テーマ毎に大別されており、その範囲の広さは驚くばかりのものであった。だがそれぞれ一つずつを拾い上げればいわゆる展示の枠を越えるものはあまりなく、専門的にやっている人にとってはちょっと物足りなさを感じるんじゃないかと思った。それでも我々が訪れた2月27日は平日であったにもかかわらず見学する人の数は相当なものであった。私は翌日もこのスミソニアン博物館の見学にあてた。

次に訪れたのはワシントン動物園である。動物園を訪れたのには理由があった。というのはクマ会議にこの動物園から一人の女性が参加していて会議でMさんが彼女と親しくなったからである。そのついで私も行ってみたのである。Mさんは前の日に彼女に会い、いろいろと話ができたらしいけれど残念ながら私が行った日にはその人は休みだったので会えなかった。その代わりに、Mさんがコンタクトをとってしてくれた動物園の獣医師に会いに出向いたのである。当日動物園に行ったところ何だかんだで昼頃まで当の獣医師とは会えないまま動物園内をブラブラと見学した。ワシントン動物園の目玉商品であるジャイアントパンダをはじめ、まあ日本のものとはそう変わらない園内を見学した。そうこうしているうちに昼になったので約束の場所に行ってみた。そこへベージュ色のユニフォームを着た二人の女性が現れた。見た目ですぐに獣医師だとわかり、こちらから話しかけてみた。Mさんが話を付けてくれたので直ぐに私のことを理解してくれた。そこで、この動物園でクマについて何か研究を行っているかということ聞いたところ、ここでは獣医師とは別に研究者がいてその人たちが研究を行っているので彼らと呼んでくるという一人はどこかへ消えていった。もう一人の女性は、アフリカゾウの舎内に入り水浴び、そうじを慣れた手つきでやり始めた。獣医師といってもやはり飼育係としての役割の方が強いんだろうなあとと思いながら彼女のキビキビと働く姿にしばし見入っていた。消えた彼女は別の女性を引き連れて戻ってきた。その彼女の口から残念ながらクマをやっている人は今日はいないことを聞かされ残念に思っていたところ、‘後で論文を送って上げよう’ということを言われたので‘ぜひお願いします’と言って私の住所と名前を知らせた。お礼に、ここぞとばかりに例の日本から持ってきた着物女性のしおりを彼女らにあげたところたいそう感激してくれた。帰り際に握手を求められたのもこの土産の効力のおかげとしか思えなかった。この3人の女性は仲々の美人であったことを付け加えておく。

トロピカル・フロリダ

クマのこととは全然関係なく、ワシントン、D. C. の次にフロリダを訪れた。それは去年の夏まで同じ教室にいて同期生であったマレーシア生まれの留学生がフロリダ大学に留学しているので彼に会いに行くためにだ。ワシントン、D. C. よりグレイハウンドでほぼ1



トロピカルなムードが漂うマイアミでの夕暮れ。

さすがに南に来たとあって温暖というより暑いくらいの日差しが照り、行き交う人の約半分は半袖の服を着ていた。北海道からもってきたダウンジャケットを手を持っている私がまるでバカにみえたであろう。ゲイネスビルは大学の町で、町に住むほとんどの人が大学の関係者であることを聞かされた。彼の家（3人で共同生活をしていた）に着き荷物を置いてすぐに大学を案内してもらった。着いたその日はちょうどフェスティバルが催されていて、一般の市民も交えて演奏会やらバザーやらをやっていた。そこに集まった人たちはギターの奏でる陽気な曲に聞き入ったり、ビールやジュースを飲みながら会話をはずませていた。日曜日の夕方このようなのんびりとした光景は、この地では月に1度くらいはみられるという。我々は久しぶりの日本語での会話に話がはずみ、その後の北海道の様子や彼の研究のことやクマ会議のことを話した。その夜は彼の手料理でフライドチキンとごはんを御馳走になった。なんでも近くにオリエンタルフードを売る店があって、日本のものもいくらかでも手に入るらしい。米はもちろん納豆、豆腐まで。次の日は、彼の研究室と獣医学部を案内してもらった。アメリカでは獣医になるためにはまず4年間の一般課程がありその上にまた4年間のプロフェッショナルコースというのがある。資格は6年でとれるのだけれども8年間勉強することになっているのだという。とくにそのプロフェッショナルコースに入ると毎日講義やゼミや実習に追われ相当忙しいと聞かされた。獣医学部を見て回っていると確かに臨床をやっている人にけっこうふけた人が多いのが目についた。また、大学に入っても途中でやめていく人もかなり多いということだ。それだけ大学に入ってから勉強は厳しいのだという。翌日、せっかくフロリダまで来たのだからかの有名なキーウエストまで足を運んでみようと思い、彼も誘ってみたが残念ながら忙しいので行けないと言われた。仕方がないので1人で試みることにした。ゲイネスビルよりさらに南下しマイアミを訪れた。ライトグリーンに輝くマイアミビーチで泳いだ後、目的のキーウエストに行ってみることにした。そこでホテルに荷物を置いて貴重品だけをもち、マイアミで買ったビーチサンダルをひっかけてグレイハウンドに乗りキーウエストに向かった。が、その時に入ったホテルが大きな問題であったのだ。キーウ

日の行程で南下し、3月2日フロリダ州のゲイネスビルに着いた。彼に予め電話で到着時間を連絡しておいたので、バスステーションまで彼が迎えに来てくれた。約半年ぶりにみる彼はもうすっかり南国の人になりきっていた。といっても彼は元々南国人なのであるから水を得た魚といったところなのであろう。もう寒い所はいやだと私に語った。さ

エストの印象は、もう少し自然が残された場所かと思っていたのがまったくの私の見当違いで、そこは完全にリゾート化され、岸には別荘、ヨットはもちろんモーターボート、エアクラフト、それにヘリコプターまでがあったのには驚いた。これはあまりおもしろくないと思い、キーウエストに着いたらすぐに折り返し乗ってきたバスに乗り込んだ。その夜マイアミに戻ってきたのは夜中の11時であった。そしてそそくさとホテルに戻ったのだが、そこでは私を愕然とさせることが起こっていた。部屋に入ろうとするとドアの鍵が壊されており、中では私の衣類が散乱していたのである。瞬間的にこれはまずいとわかり、すぐに置いていったパスポートがあるかどうかを確かめ、何が盗まれたのかを確認した。そして管理者のところへ行き事実をそのまま説明した。しかし管理者の反応は意外に冷たかった。そこに電話があるから警察に電話しろという。そんなこと言われてもこっちも困るわけでその人に電話をしてくれと言った。彼はあまり気が進まないような感じで電話をかけ、私に代わってあれこれと警察に説明していた。途中で私に替わり、名前、本籍、盗まれたもの、その価格などを聞かれ、最後にこの事件のナンバーを聞かされて電話は切れた。そのあと管理者が部屋の鍵を簡単になおし、これでOKだといって引き上げていった。私としてはあまりOKだとは思えなかったのだが、夜も遅かったので仕方なく散らかされたものを片づけ、すごい落ち込みの中で眠りについた。ちなみに盗まれたものは、スーツ、毛の上着、ジャージ、テープレコーダー、セーター、ズボン、パンツ、ベルト、ハンカチ、ネクタイ、キーホルダー、タイピンであった。この中で会議の時にもらった2個のタイピンを盗まれたことが何とも口惜しい。この日の私のメモには最悪の日と書かれてある。が、後で改めて考えてみると、これもアメリカを象徴する一面でもあり、それを目のあたりにすることができたのも一つの収穫かなと認識している。次の日警察に行き盗難証明書をももらった後、このまま旅が終わったのではあまりにもいま一だと思い、よりいっそうの期待を込めてカナダに向けて飛び立った。

Dr. Herrero との出会い

私にとって今回の渡米の楽しみとして3つのことがあった。1つはクマ会議に参加すること、1つは久しぶりに旧友と再会すること、それともう1つはカナダに行くことであった。カナダのどこへ行きたいということではなく、ただ漠然とカナダに行きたいといつの頃からか思い始めていた。といってもほとんどカナダという国についての知識はなかったし、ただ何となく写真でよくみるような広々とした自然のある国というイメージしかもっていただけなのであるが。今回実際にカナダに行ってみてすごくいい印象をもって帰ってくる事ができた。1つには、ロッキーの山々の雄壮な姿に魅せられたこと、国立公園でシカやエルクやムースなど多くの哺乳動物を見れたことである。もう1つうれしかったことは、一人の人物と出会い、とても親切にいただき、その上私の研究について興味をもっていろいろとア

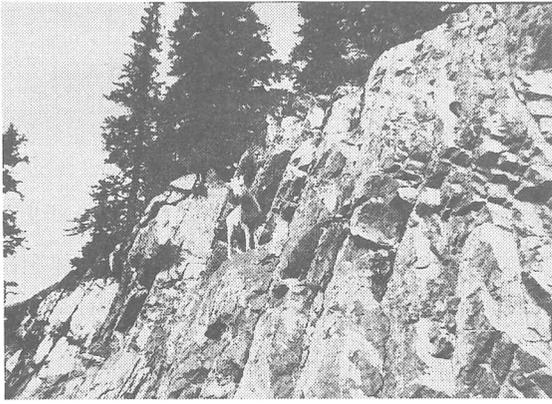
ドバイスをしてもらえたことである。

私が Dr. Herrero を初めて知ったのは、一昨年秋、修士論文を書いている時であった。私は当時獣医学研究科大学院修士課程2年目としてかつ北大ヒグマ研究グループの6年目としてエゾヒグマの繁殖生理についての研究をまとめていた。その時、参考文献として読んでいた論文の中に彼の論文が入っていたのである。その論文は、ハイログマとアメリカクロクマの繁殖に関してかなり詳しく述べられており、私の修士論文に引用させてもらった。その論文を読みながらこの著者がどんな人物なのか自分ながらに空想したことがある。どうせ教授と呼ばれる人だから、もうフィールドワークはあまりやらずに部屋で論文を書いている、いい年をした鬚面のおじさんというイメージをもっていた。そして渡米する前に、カナダに行ってみたくらいという願望からどうせならカナダにいる研究者に会いに行けばいいと思い、ちょうど Dr. Herrero の論文を思い出したので彼に手紙を書くことにしたのである。これまで英語で手紙など書いたことがなかったので、参考書を買って読んだり同じ講座にいる留学生に添削をしてもらってえらく苦勞して書いたのだった。もし会議に来られるのならその時にクマの繁殖生理について議論をしたいということを書き、カナダに行くことは話をする中で伝えればいいと思って書かなかった。数日後に彼から返事が届いた。そこには 'I will be at the Williamsburg bear conference and I will be pleased to meet with you there to discuss your research.' という一文が書かれてあった。正直言ってあれだけ苦勞して手紙を書いたのにたった一文で片付けられるとは、とも思ったのであるが、それでもこれで準備は整ったぞと秘かに喜びをかみしめつつ心はカナダに思いを馳せていたのである。

会議は予定通り順調に進められた。そして明日で会議が終わるといふ夜、やっと Dr. Herrero と話をする機会を得た。夜の Workshop が終わった時ちょうど Dr. Herrero と居合わせたので思い切って話しかけてみた。'私が日本からあなたに手紙を書いた者です' と。「Nice to meet you.」という返事とともに握手が返ってきた。彼は身長2 m 近くありスラッとした体格で少し白髪が混じってはいたが、初めて見た時は30才ぐらいと思ったぐらい若々しくかつさわやかな男性であった。何とも優しそうな笑顔で私を迎えてくれた。その時は夜も遅かったので会議が終わったら彼に会いにカナダに行くことを告げ、住所と電話番号を私のメモ帳に書いてもらった。

バンフ国立公園

3月9日、既に桜の咲くバンクーバーよりグレイハウンドでバンフ国立公園に向かった。バスは夜通し走り続けバンフに着いたのは翌朝の7時であった。朝の陽光が雪と岩肌のロッキーの山々を照らし出していた。バスから降りるとすぐにレンタカー (CHEVROLET をシボレーと読めなかった) を借りてモーター探しにバンフの街を走り回った。適当なモーター



big horn sheep. アルバータ州バンフ国立公園にて。

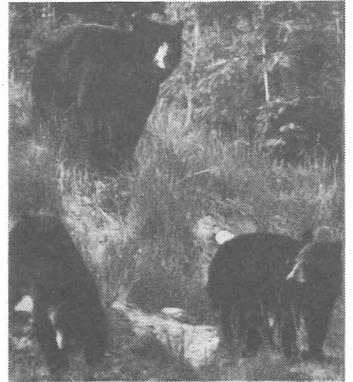
てもなく道路の脇に3頭の獣がいるのに気づいた。近づいてみると大きな角をもった羊 (big-horn sheep) であった。こんなにも道路の近くに現れるのだから人慣れしているのだろうと思いながら、車から外に出ようとする一瞬警戒の気配が変わった。その時の彼らの目はまさに野生の目であった。こっちも一瞬ハッとして身構えてしまった。その後も、white-tail deer, moose, elk と次々に私の眼前に現れては私を楽しませてくれた。延々と5時間くらい国立公園の中を時速100kmで走り続けたが、どこまでも果てしなく続くロッキーの山々、まったく人の手が加えられていない森林の連続、その上ほとんど出会う人のいないことが私を満足させてくれた。これだけごくあたり前のように目のあたりにできる自然がまだ残っている。当然カナダにも森林開発の波は押し寄せているのだろうけれど、もし野生動物を見ようと思えばいつでもみられるというこの現実を素直にうらやましく思った。と同時に、この場をうまく使えば研究あるいは自然教育には格好の場であるなあと考えた。ただ、森林自体はほとんどが単調な針葉樹林のみからなるもので、クマなんかにとっては食物は決して豊富といえるものではないなとも思った（このことは Dr. Herrero も言っていた）。いつか夏場のキャンプ者や登山者でにぎわう時の各利用者のマナーものぞいてみたいものである。帰り道は、夕日に照ら

を見つければ荷物をそこに置き、抜けるような青空と白く光るロッキーの山々に誘われてすぐに外に飛び出した。左ハンドルの不安を感じつつもレンタカーで公園内を回ることになった。その前に情報集めのためにビジターセンターに行き、数枚のパンフレットとドライブコースを書いてもらった地図とを手にして公園へと向かった。高速道路のような普通の道からはずれて山道に入っ

 Parks Canada
1885-1985: 100 Years of Heritage Conservation



YOU are in Bear Country



Bears are wild animals that demand your respect. They are strong. They are agile. Respect them. They will defend themselves, their young and their territory if they feel threatened.

Knowledge and alertness can help you avoid an encounter with a bear.

All Bears are Potentially Dangerous

They are unpredictable and can inflict serious injury. Because of the danger, NEVER feed or approach a bear. It is unlawful to entice, approach or feed bears - this is to protect both you and the animal.

Every bear has individual behavior characteristics. Not even the experts can be sure how one will react in a particular situation.

バンフ国立公園のビジターセンターでもらったパンフレット。山に入ることは即ちクマの生息域に入ることだから、その心構えをするようにと書かれてある。

し出されたロッキーの山々を横目で見ながら車を走らせた。その日は存分にカナダを体で味わいつつ明日の Dr. Herrero との再会を楽しみに床についた。

Dr. Herrero との再会

3月11日、快晴の中 Dr. Herrero に会いにカルガリーに向けて車を走らせた。カルガリーはバンフより約100km西に行ったところにある。カルガリーの街に入っても道路が立体交差をしていたり聞いたことのない地名の入った標識が目に入るだけで、目的のカルガリー大学にはどう行けばいいのかさっぱりわからない。ガソリンスタンドで道順を聞いてみるがやはりよくわからない。それでも30分くらい車を走らせているとそれらしい雰囲気になってきて何とか大学にたどりつけた。大学に着いた時には緊張と不安とで汗びっしょりになっていた。大学に入ったのはいいけれどもむこうの大学は日本の大学よりはるかに広く、またどっちに行ったらいいのかさっぱりわからなくなり、とりあえず人に尋ねて電話ボックスを探しあてた。そこから予め聞いていた Dr. Herrero の部屋に電話をかけてみた。何回かの呼び出し音の後若い女性の声が返ってきた。「Mr. Herrero, please」と言う若い女性に替わって男性の声になった。その声は聞き覚えのあるものでまさしく Dr. Herrero 自身のものであった。思わず緊張感が緩み、声を1オクターブ上げ、今大学に着いたこと、これから会いにあなた部屋に行きたいことを告げた。彼は、私の今居る場所を確かめそこからの行き方を説明してくれた。すぐに電話を切り彼の部屋へ向かった。彼の居る所はサイエンスビルの12階にある環境デザインという部屋であった。エレベーターから降り彼の部屋はどこだどこだとぐるっと一周してみたらぱったりとエレベーターの前で彼と出会った。そこで再会の握手を交わし、会議後の道中のことなどを聞かれ、こちらも片言の英語で何とか受け答をしながら彼の部屋へと案内された。その部屋が以外と狭いには少々戸惑ったが、椅子に腰を落ち着かすとさっそくクマの話になった。会議での発表内容の話にはじまりクマの生態、生理、保護管理まで一通り話が済んだところで私が朝飯を食べていないことを知り、食堂に案内してくれた。そこでは大学自家製の豆の入ったスープやパンを食べながらいろいろと話をした。会う前には果たしてどれだけ会話を続けられるだろうかとつまらないことを考えていたのだが、やはりそれは余計な心配であった。彼の息子が現在札幌にいて、スキーのインストラクターをやっていること、彼は1度日本に来たことがあり日本食を気に入ったこと、来年カルガリーで行われる冬季オリンピックのことなどを話してくれた。食事が済むと今度は彼が今行っている研究を紹介してくれた。彼は、昨日私が見て回ったバンフ国立公園で研究を行っており、今はメスグマ2頭に発信機をつけてその行動を追っているのだという。私の前にコンピューターで描いた大きな地図を広げてメスグマ2頭の採食場所と植生との関係について説明してくれた。夏場にはある一点に集中して採食を行い、そこで草本の根っこを掘り返して食って

いるのだと聞いた時思わず「same in Hokkaido」と叫んでしまった。発信機、アンテナ、受信機などを一通り見せてもらい、次に私の研究についてアドバイスしてもらった。私が現在疑問に思っていること、これからやりたいことを告げると彼は熱心に自分のデータを使って説明してくれた。最後には私の研究をもっと進めるべきだと言ってくれた。この言葉は、昨日ロッキーの山々を見ながら思わず入った気合いによりいっそう固いものを加えてくれた。彼は昼から用事があるのでその後夕食を一緒に、と誘われたのだが、私は本日帰らないと予定していた14日の飛行機に乗れないことを告げ断わりの返事を述べた。彼はビルの前まで私を見送ってくれた。最後にお世話になったと礼を言い、握手をしながらぜひもう一度来たい、次の会議に、と告げた。そして彼も答えてくれた。「Next conference」と。

帰 途

Dr. Herrero と別れた後私は再びバンフに戻り、レンタカーを返して夜のグレイハウンドを待った。といくところであったのが、バスステーションに行くと丁度バスが出ていくところで、あれっと思い、まさかという言葉が口から漏れ、時計と発車時刻を見るとやはりそのまさかであった。バンクーバーとバンフとでは実に1時間の時差があることにまったく気づいていなかったのである。丸2日間も。何と愚かなと思っても後の祭りで、結局次のバスを待ち続けた。4時間も。予定外のバスに乗り込みバンフをあとにした。来る時はずっと眠っていたのでわからなかったのだが、バスは延々と山の中を走り抜け、こんなにも山奥に入っていたのかということを知った。バンクーバーには1時間も早く着き、そのおかげで当初予定していたシアトル行きのバスに駆け乗ることができ、そこでホッと一息ついた。今度は来た時とは逆にカナダからアメリカへの税関をくぐり再びアメリカに戻った。シアトルでは最後の晩さんとばかりにちょっとリッチなホテルに泊まり、夕食には一人でビールで祝盃をあげた。約半月、異国の地で生活をし、その珍しいものばかりを目のあたりにし、緊張感と疲労とで身体はかなりくたくたになっていたが、さまざまな場面を思い出しながら満足感の中で心地よい酔いが回った。

完